

特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン

2006年度年次報告書

チャイルド・ファンド・ジャパンは、
1975年より、アジアを中心に貧困の中で
暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の
自立を目指した活動をしています

フィリピン人の写真家Erik Liangoren氏によって
撮影された、マニラの貧困地域で暮らすチャイルド



理事長ご挨拶

“生かし生かされる”国際協力を

チャイルド・ファンド・ジャパンは2006年度も、皆様からの暖かいご協力によりフィリピンとネパールで支援活動を継続いたしました。また、米国のキリスト教児童基金(CCF)との協働により、新たに「スマトラ沖大地震及びインド洋津波災害」の被災者に対する復興支援をインドネシアとスリランカで実施、2006年5月に発生したインドネシア・ジャワ島中部地震では被災者に復興支援を行いました。さらに、同年11月から、スリランカでスポンサーシップ・プログラムによる支援を開始することができました。ここに感謝とともにご報告いたします。

1975年、フィリピンから小規模で始まった活動が、このような広がりを持つことができたのは、皆様のご協力、先達の努力、そしてフィリピンを中心にアジア諸国で歩みを共にしてくれるパートナーの力が結集されたことによります。

2006年度、私どもは、32年にわたる歩みの中で、大切にしてきた指針を再確認するため、ビジョン(目標)とミッション(使命)を策定いたしました。このビジョンとミッションは、長年活動をともにしてきたフィリピン事務所のスタッフとともに作り上げたもので、互いに“生かし生かされる”という思いが込められています。私たちが目指すべき方向性として、スタッフ一人ひとりが心の礎にすると同時に、皆様にもご理解とご協力をいただけましたら幸いに存じます。

「すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成」という、壮大な目標を達成するために、これからも神様の導きを祈り求めつつ日々の支援活動を着実に実施してまいります。どうか引き続き皆様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。



特定非営利活動法人
チャイルド・ファンド・ジャパン
理事長 深町 正信(青山学院院長)

ChildFund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン(目標)、
ミッション(使命)に
基づいて活動します。

ビジョン(目標) すべての子どもに開かれた未来を約束する国際社会の形成
愛のバトンタッチ

チャイルド・ファンド・ジャパンは、第二次世界大戦後、海外からの支援を通して、日本の戦災孤児の成長を守ることから活動を始めました。時代が変わり、支援の受け手から担い手へと立場が変わっても、そこに一人ひとりの子どもが希望を持って生きることのできる社会を目指す姿勢は変わりません。

ミッション(使命) 生かし生かされる国際協力を通じて子どもの権利を守る
子どもの笑顔のために

チャイルド・ファンド・ジャパンは、ビジョンを達成するために、支援を通じてつながるすべての人々が、様々な違いを超えて、お互いが人生に意味を見出し、「生きていてよかった」と思える国際協力を実践することを通して、子どもの権利を最優先に位置つけた活動を展開します。

目次

理事長ご挨拶	理事長 深町 正信	2
チャイルド・ファンド・ジャパン事業概要		
支援者数と支援チャイルド数の3カ年推移		3
国内の活動		4-5
スポンサーシップ・プログラム		6-9
支援プロジェクト-フィリピン		10
支援プロジェクト-ネパール		11-13
緊急・復興支援事業		14-15
2006年度会計報告		16-18
組織図・役員名簿		19
チャイルド・ファンド・インターナショナルについて		20

チャイルド・ファンド・ジャパン事業概要

1. 地域開発支援事業

スポンサーシップ・プログラム(6-9p)

スポンサーとチャイルドとの一対一のつながりを通して、子どもの健全な成長と地域の自立を目指した包括的な支援を行う事業です。

2006年度は、フィリピンで25カ所の協力センター、スリランカで2カ所の協力センターに対して支援を行いました。

支援プロジェクト(10-13p)

貧困に起因する様々な問題の中で、特定の開発課題に応える支援事業です。2006年度はフィリピンで1件、ネパールで3件の事業を実施しました。

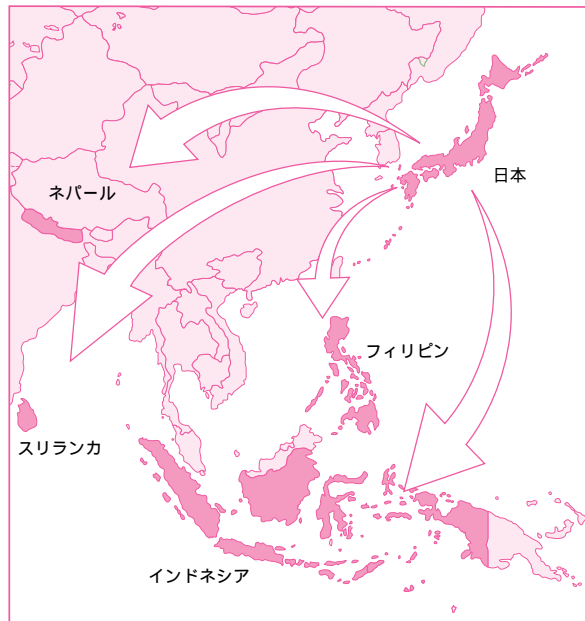
2. 緊急・復興支援事業

台風や地震などの自然災害の被災者や、地域紛争による避難民を支援する事業です。

従来は、スポンサーシップ・プログラムの対象地域での緊急支援活動を主としてきましたが、2006年度から緊急・復興支援を担う体制を強化し、インドネシアとスリランカの津波被災地、またインドネシア中部ジャワ島の地震被災地で支援事業を行いました。

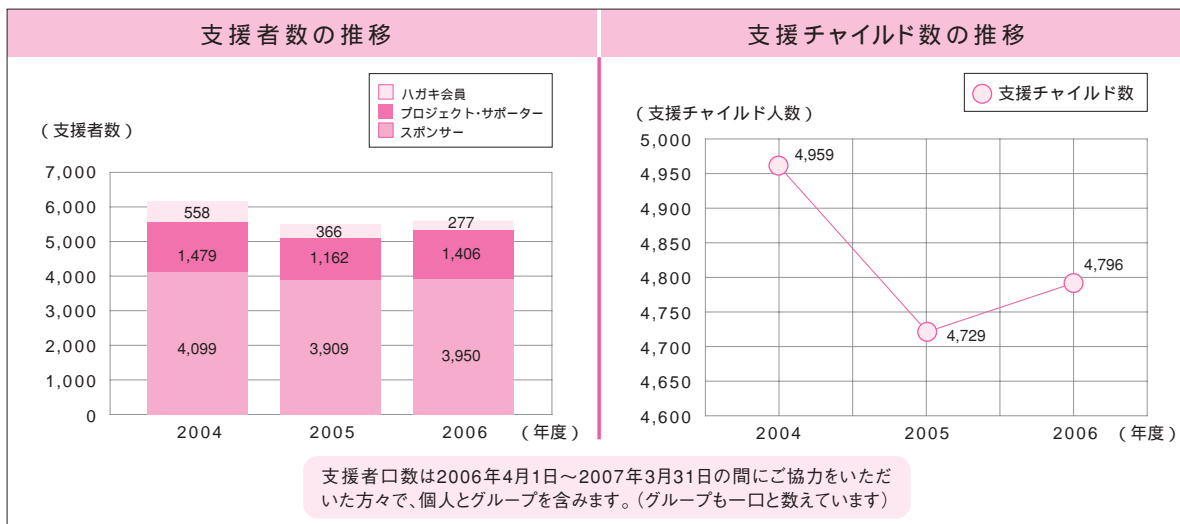
3. 広報・啓発・提言事業

国内でチャイルド・ファンド・ジャパンの活動を広め、理解を深めていただくための事業です。2006年度はスリランカでのスポンサーシップ・プログラムの開始にともない「スポンサー募集キャンペーン」を行いました。



支援者と支援チャイルド数の3カ年推移

2006年度は計784名の方が新たにスポンサー、プロジェクト・サポーター、はがき会員として加わっていただきました。2006年11月から実施した「スポンサー募集キャンペーン」により、減少傾向にあった支援者数が増加に向かい、昨年度を上回ることができました。これにともない、支援チャイルド数も67名増加することができました。今後とも皆様の変わらぬご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



国内の活動

2006年度はチャイルド・ファンド・ジャパンの活動をより多くの方に知っていただくため、支援者の方々や企業、団体の協力のもと、スポンサー募集のキャンペーンやイベントへの参加を積極的に行いました。また、2006年7月、1975年から行ってきた子どもたちへの支援活動を通じて、日本とフィリピンの相互理解と交流の促進に貢献したことが評価され、「外務大臣表彰」を受賞しました。皆様の変わらぬご支援に心より感謝を申し上げます。

支援者の方々のご協力

書き損じハガキ・未使用切手

2006年度は全国783名の個人・団体の皆様から、計49,278枚の書き損じハガキを送っていただきました。未使用切手とあわせると、2,442,048円の支援金となり、プロジェクト・サポーター寄附金として通信費等に活用させていただきました。(書き損じハガキ、未使用切手は年間をとおして集めています。どうぞご協力をお願いいたします)

第2回スマイリング・パートナーズ チャリティゴルフ大会

2006年12月、スポンサーで読売巨人軍コーチの篠塚和典さんの主催でチャリティゴルフ大会が開かれ、170名以上の方が参加、20名のチャイルドの支援を継続してくださいました。

チャリティ・イベント

藤沢北教会(神奈川)、江田明子さん(埼玉)、会津キリスト教連合会と「ウォーク・フォー・ネパール実行委員会」(福山)他が、地元でチャリティ・イベントを開催してくださいました。

ボランティア活動

2006年度はボランティア制度が3年目に入り、110名の方が登録して、在宅での翻訳や事務局での作業、イベントのお手伝いをしてくださいました。また事務所のスタッフが(福)杉並区社会福祉協議会杉並ボランティア・地域福祉推進センターで「ご近所のできる国際協力ボランティア」の講座を担当しました。

企業・団体のご協力

2006年度は約40社(団体)に社会貢献の一環として、書き損じハガキ、スポンサーやプロジェクト・サポーター、またイベント共催など多岐にわたってご協力をいただきました。

スポンサーシップ・プログラムへのご協力

企業との合同企画

2006年8月、昨年に引き続き企業5社との協働で「チャリティ古本市」を開催しました。ご協力くださった企業は、キーコーヒー株式会社、キッコーマン株式会社、株式会社ジャパンエナジー、日本たばこ産業株式会社、株式会社日立ハイテクノロジーズです。古本の売り上げにより、5名のチャイルドの支援ができました。

チャイルド・ファンド・ジャパンの支援者の皆様からは、5,000冊以上の古本が寄せられました。ご協力をありがとうございました。



古本市のようす

埼玉県の生活協同組合ドゥコープ組合員の方々から生活協同組合ドゥコープの組合員の皆様から、昨年に引き続き「Do!平和募金」をとおして7名のチャイルドを支援してくださいました。

支援プロジェクトへのご協力

OKIグループの社員募金「OKI愛の100円募金」/三井住友銀行ボランティア基金/富士ゼロックス株式会社及び端数倶楽部よりネパールのオカルドウンガ地域病院事業へのご協力

ソニー株式会社/ファイザー株式会社よりマッチングギフト*によるご協力

*社員の方が社内外の社会貢献活動や公益団体に寄附すると企業も同額寄附する制度

その他のご協力

株式会社カカコム「価格.COMクリック募金」によるご協力1日1クリックが1円の寄附になります。詳しくはチャイルド・ファンド・ジャパンのHPをご覧ください。(2006年度より継続)

ノースウエスト航空会社 エアケア・チャリティ・プログラムによるご支援
マイルをご寄附いただくと、ノースウエスト航空等の航空券に換え、チャイルド・ファンド・ジャパンスタッフが支援活動のため現地を訪れる際に用いられます。2006年は埼玉県蕨市立野高高等学校から、日本・アジア間往復航空券170枚に相当するマイルが寄贈されました。(2005年度より継続)
<http://www.nwa.com/jp/jp/corpinfo/aircares/>
☎0120-747-050にて受付

イーココロで買い物したポイントを国際協力へ株式会社ダビンチのご協力で、イーココロを通して買い物をしていただいた際のポイントを、チャイルド・ファンド・ジャパンへ寄附していただくことができます。詳細はイーココロホームページをご覧ください。(2004年度より継続)
<http://www.ekokoro.jp/>

(福)杉並区社会福祉協議会杉並ボランティア・地域福祉推進センターとの合同企画「チャリティ古本市」実施
2007年3月26日に開催された杉並区の活字文化フェスタにて「チャリティ古本市」を開催しました。区民の皆様から、3000冊以上の古本が集まり、フィリピンの支援活動にご協力いただきました。

イベント・報告会

フィリピンと日本の子どもの絵画展

第1回「夢 = dream」in マニラ《2006年5月》

第2回「愛 = love」in 東京《2007年2月》

「TSUNAGARI PROJECT」として、夢をテーマにした第1回絵画展をマニラで、愛をテーマにした第2回絵画展を東京で開催しました。東京で行われたレセプションには、ドミンゴ・シアソン駐日フィリピン大使も参加をしてくださいました。開催にあたり、在日フィリピン大使館、在フィリピン日本国大使館、国際交流基金よりご後援を、ペンてる株式会社、フィリピン航空、株式会社ジャパン・エナジー、日本たばこ産業株式会社、株式会社フォルツァ・グラフィコ、株式会社リピングプロシード、サン美術印刷株式会社、日本ケロッグ株式会社よりご協賛をいただきました。



フィリピンの子どもの絵画



日本の子どもの絵画

ピース・チャリティ・コンサート《2006年11月》

日本フィリピン友好年を記念して、フィリピンの子どものためにバイオリニストの林原澄音さんを中心に3名の演奏家によるチャリティ・コンサートが開かれました。

コンサートでは、チャイルド・ファンド・ジャパンのオリジナル曲の初演をはじめ、チャイルドが「平和」をテーマに書いた詩の紹介も行いました。



右から林原さん、本田さん、樋浦さん

報告会・国際理解教育活動

学校、教会、グループの集まりに事務局スタッフが伺い、活動の説明やご質問にお答える報告会を計37回行いました。また中学5校、高校2校、大学5校が国際協力やボランティア活動を学ぶために東京事務局を訪れました。



事務局へ来所した都立国分寺高校の皆さん

その他の広報活動

イベントへの出展

チャイルド・ファンド・ジャパンをより多くの方に知っていただくために、地域でのイベントや同窓祭などに出展しました。

- ・東京女子大学園遊会(4月)
- ・株式会社リコー社会貢献クラブ講演会(4月)
- ・青山学院初等部ファミリーフェア(5月)
- ・三鷹国際交流フェスティバル(9月)
- ・青山学院大学同窓祭(9月)
- ・グローバルフェスタ(10月)
- ・池袋ふれあいバザー(11月)
- ・富士ゼロックス株式会社社会貢献フォーラム
/古本市として(2月)
- ・日本たばこ産業株式会社アフタヌーンコンサート(通年)



株式会社リコー社会貢献クラブ講演会

スポンサー募集のキャンペーン実施

スリランカでスポンサーシップ・プログラムを開始するにあたり、2006年秋にダイレクトメール、新聞チラシ等によるスポンサー募集のキャンペーンを行いました。(計211名がスポンサーとして、322名がプロジェクト・サポーターとして新たに申し込みをしてくださいました。)

マスコミによる紹介

新聞、ラジオ等のメディアを通して書き損じハガキ回収運動やイベント開催などの活動が紹介されました。

資料の貸し出し

子どもたちの日常や支援活動を紹介する写真パネルやビデオの貸し出しを行いました。

スポンサーシップ・プログラム

スポンサーシップ・プログラムは、スポンサーとチャイルドとの一対一のつながりを通して、子どもの健全な成長と地域の自立を目指した包括的な支援を行う事業です。このプログラムは、子どもの成長(教育・保健)、家族の生活改善(収入向上)、住民主体の組織づくり、自己啓発プログラムを支援します。貧困の中で暮らす子どもが元気に成長し、家族や地域の人々が自分たちの力で問題を解決する力を身につけていきます。2006年度はフィリピンで支援を継続するとともに、スリランカで新たに活動を開始しました。

スポンサーシップ・プログラムの目指す2つのゴール

ゴール1 チャイルドの健全な成長

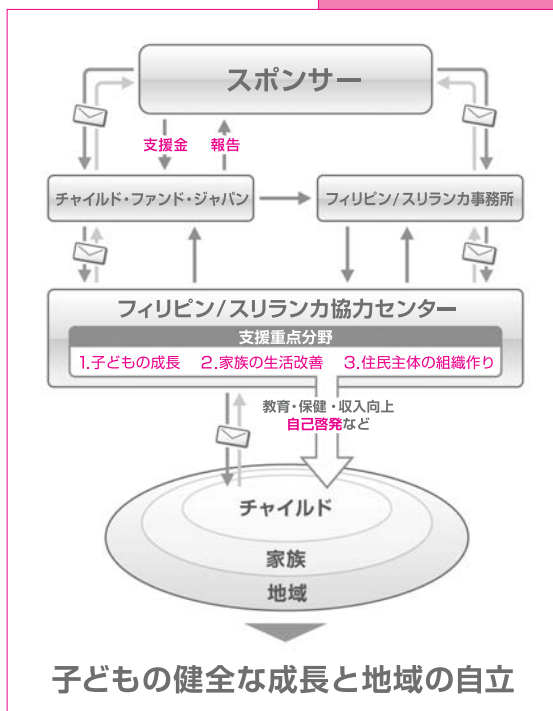
将来を担う子どもたちへの教育、健康に生活するために必要な保健・医療等、一人ひとりの必要に応じた支援をしています。チャイルドには担当のスタッフが付き、家庭や学校訪問をとおして日々の成長を見守っています。

チャイルド・ファンド・ジャパンの協力センターでは、演劇や絵画を活動に取り入れて、個性を伸ばしながら内面を育てることに力を注いでいます。

ゴール2 地域の自立

チャイルドの家族や地域の人々へ、職業訓練や住民組織の立ち上げ、事業資金の融資等の支援をしています。人々が協力して自らの問題を解決していくことができるよう、中・長期的視野にたったプログラムを実施しています。支援を開始した1975年から2006年度末までに、フィリピン全土で計26カ所の協力センターが自立を達成しました。

スポンサーシップのしくみ



2006年度支援チャイルドデータ

支援チャイルド男女数



計 4,796名

支援チャイルド学年分布



計 4,796名

チャイルド・ファンド・ジャパンの支援を離れたチャイルド (2006年度)

理由	人数
卒業	501名
経済的安定	16名
転居	118名
就業による中退	59名
学業不振による中退	35名
地域の自立/終了	92名
結婚*	10名
死亡	2名
その他	36名
合計	869名

*フィリピンの「家族法」は、18歳以上21歳未満の者が結婚するときは親の同意が必要、21歳以上25歳未満の者は親の同意なしで結婚できるが、その場合婚姻届提出後3ヶ月で結婚が成立すると規定しています。但し、この年次報告書で用いている「結婚」には、そうした法的な結婚に加えて、18歳未満で同棲して家庭を築くために支援を離れたチャイルドたちも含まれています。

《フィリピン・スリランカ》



2006年度 チャイルド・ファンド・ジャパン協力センター一覧

フィリピン協力センター				
センター番号	協力センター名	協力センターの運営団体	支援開始日	チャイルド定員数※
10	サンタ・ラファエラ・マリア・ファミリー・サービス・センター Santa Rafaela Maria Family Service Center	聖心侍女修道会	1983.08.01	300名
19	インファンタ・コミュニティ・デベロップメント・センター Infanta Community Development Center	インファンタ・インテグレートド・コミュニティ・デベロップメント・アシスタンス (NGO)	1988.09.01	280名
21	ブカス・バラッド・コミュニティ・センター Bukas Palad Community Center	アラミノス教区	1989.08.01	400名
24	マザー・リタ・バルセロ・コミュニティ・センター Mother Rita Barcelo Community Center	フィリピン・アウグスチノ宣教会	1991.12.01	162名
26	イナ・ナン・ブハイ・コミュニティ・センター Ina ng Buhay Community Center	チャイルド・ファンド・ジャパン フィリピン事務所	1992.12.01	147名
27	パヌルヤン・センター Panuluyan Center	ラサレット・パナマ財団	1995.02.01	300名
28	カタグワン・センター Kataguwan Center	セントメリー・マグダレン小教区	1995.02.01	170名
30	コミュニティ・パートナーシップ・フォー・インテグレートド・チャイルド・デベロップメント・センター Community Partnership for Integrated Child Development Center	チャイルド・ファンド・ジャパン フィリピン事務所	1996.01.03	350名
32	セントフランシス・オブ・アシジ・センター St. Francis of Assisi Center	チャイルド・ファンド・ジャパン フィリピン事務所	1996.02.01	250名
33	スピード・フォー・スリガオ・センター SPEED for Surigao Center	ダバオ医科大学財団 プライマリーヘルスケア研修所	1996.03.18	400名
34	NDBRCFI・ラネスティン・デベロップメント・センター NDBRCFI LANESTIN Development Center	ノートルダム・ビジネス・リソース・センター財団	1996.03.18	300名
35	セイクレッド・ハート・オブ・ジーザス・ファミリー・センター Sacred Heart of Jesus Family Center	カノッサ修道会	1996.08.01	300名
39	トゥルナン・ゾーン・オブ・ピース・センター Tulunan Zone of Peace Center	キダバワン教区	1997.02.15	100名
40	パトン・トライバル・コミュニティ・デベロップメント・センター Patong Tribal Community Development Center	カサレス・ソーシャル・アクション財団	1997.11.01	150名
41	インマヌエル・ルーラル・デベロップメント・センター Immanuel Rural Development Center	ハニワイ・カルバリオ・コミュニティ・センター (NGO)	1998.11.01	300名
42	マザー・イグナシア・ナショナル・ソーシャル・アクション・センター Mother Ignacia National Social Action Center	レリジャス・オブ・バージン・メアリー修道会	1999.01.01	150名
43	センター・フォー・コミュニティ・ヘルプ・インテグレートド・ライフロング・デベロップメント Center for Community Help Integrated Lifelong Development	ノートルダム・マーベル大学 シャンパニア・コミュニティ・カレッジ	1999.08.01	150名
44	セント・フランシス・センター・インテグレートド・エリア・デベロップメント・フォー・オーロラ Saint Francis Center-Integrated Area Development for Aurora	オーロラ州総合地域開発協会 (NGO)	2001.08.01	250名
45	オールド・サンタ・メサ・センター Old Sta. Mesa Center	アテネオ大学付属機関 センター・フォー・コミュニティ・サービス	2001.11.15	200名
46	アワ・レイディ・オブ・ナザレス・チルドレン・センター Our Lady of Nazareth Children Center	メアリー財団	2002.05.15	150名
47	タブク・ルミアワン・センター TABUK LUMIN-AWA-AN Center	タブク代牧区	2003.01.01	100名
48	ペドロ・カルングソド・ピース・センター Pedro Calungsod P.E.A.C.E. Center	セイビア大学	2003.01.01	150名
49	アルダースゲート・クリスチャン・チャイルド・センター Aldersgate Christian Child Center	アルダースゲート大学	2003.06.01	150名
50	チルドレンズ・エドゥケーション・アンド・ウェルフェア・アシスタンス Children's Education and Welfare Assistance	ノートルダム・キダバワン大学	2004.06.01	100名
51	リホック・バタ・デベロップメント・センター Lihok Bata Development Center	ミンダナオ・リソース・インスティテュート・フォー・コミュニティ・デベロップメント (NGO)	2006.06.01	100名

※チャイルド定員数には、スポンサーの紹介を待っているチャイルドの数も含まれています

スリランカ協力センター				
センター番号	協力センター名	協力センターの運営団体	支援開始日	チャイルド定員数※
2747	ダスナ・チャイルド・デベロップメント・プログラム Dasuna Child Development Program	CCFスリランカ事務所	1994.09.08 (チャイルド・ファンド・ジャパン として2006.11.20～)	800名 (チャイルド・ファンド・ジャパン として241名支援)
4224	ムンダラマ・チャイルド・デベロップメント・プロジェクト Mundalama Child Development Project	CCFスリランカ事務所	2006.10.31 (チャイルド・ファンド・ジャパン として2007.01.25～)	500名 (チャイルド・ファンド・ジャパン として67名支援)

※スリランカでのプロジェクトはCCF (Christian Children's Fund)との協力で行われています。
CCFはアメリカの国際協力団体で1985年からスリランカで活動を行っており、チャイルド・ファンド・ジャパン以外にチャイルド・ファンド・インターナショナル加盟国(※裏表紙参照)が支援をしています。

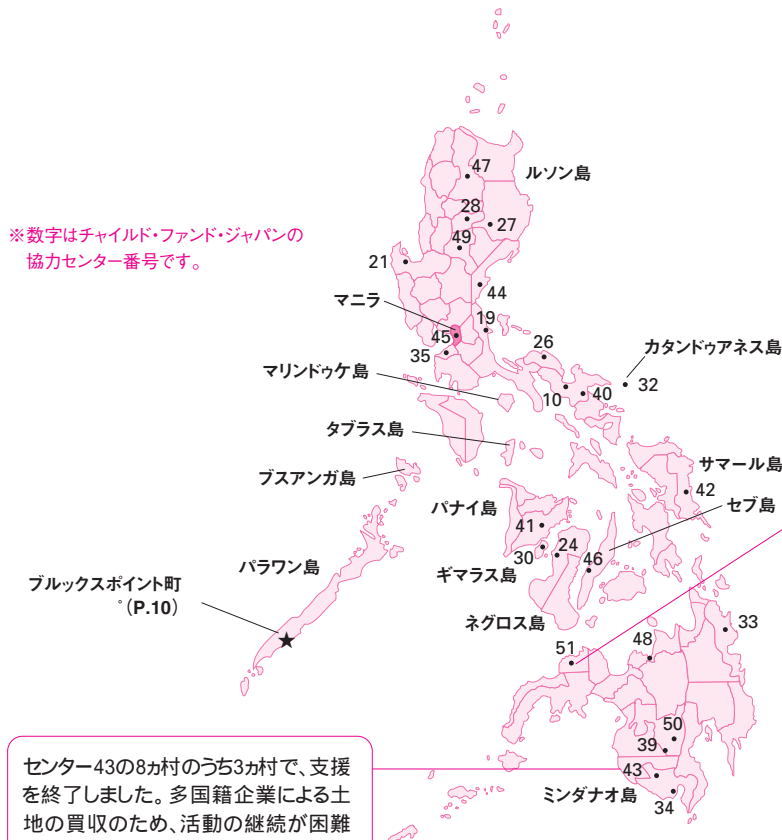
スポンサーシップ・プログラム

《フィリピン since1975》

2006年度はフィリピンの25カ所の協力センターで、スポンサーシップ・プログラムを継続し、1カ所の新センターをミンダナオ島で開設しました。

協力センターをとおして支援をしたバランガイ(村)の数は、108カ村。

協力センターをとおして支援をした住民組織の数は計76団体。



51番目のセンターを、2006年6月に開設しました。この地域は農村地帯でキリスト教徒とイスラム教徒、少数民族のソバニ族が暮らしています。ゴミ集積場で使えるものを拾って、収入を得るなど生活はたいへん厳しい状態です。



ゴミ集積場の写真

センター43の8カ村のうち3カ村で、支援を終了しました。多国籍企業による土地の買収のため、活動の継続が困難になったためです。5カ村では、継続して活動を行いました。

チャイルドのお手紙から

ジョナリン(ハイスクール4年生/センター44)

私に与えてくださったすべてに感謝したいと思います。遠くにいてもSさんの存在を感じていたの、非常に幸せだったことをお伝えたいです。私は小学校5年生だった時を覚えています。それははじめてSさんにお手紙を書いたからです。そして今、私はハイスクール4年生で卒業します。これからもお名前は忘れません。私を励まし、2番目のお母さんのようだったからです。そしてもちろん、ジョナリン、私のことも忘れないでいてください。もう一度、本当にどうもありがとう。



住民組織リーダーの声

ミルナトレドさん(センター10)

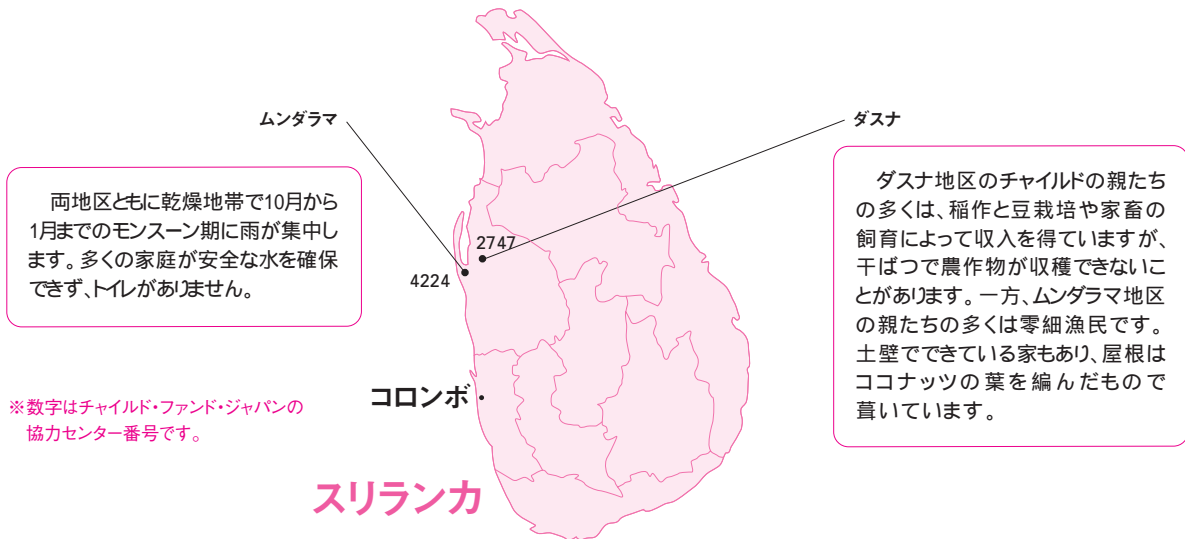
私たちは約80人のメンバーから成る協同組合です。米や砂糖を大量に仕入れて、市場価格よりも安く販売できるのが強みです。組合員でなくても同じ価格で買うことができます。裁縫の技術トレーニングを受け、収入を得る手段を学んだメンバーが大勢います。小額の融資も行います。返済に苦しむ家庭には1ヶ月分まとめて返すのではなく毎日少しずつでも返すほうが楽だとアドバイスしています。融資の返済率を上げること、メンバーを定着させて安定した活動をするのが課題です。



センターのスタッフと住民組織のメンバー

《スリランカ since2006》

スリランカ民主社会主義共和国では、列強による植民地の影響、そして1950年代からの民族紛争により、子どもたちを取り巻く環境は大変厳しい状況が続いています。また、2004年のスマトラ沖大地震の津波により甚大な被害がありました。チャイルド・ファンド・ジャパンは、津波被害の復興支援と、子どもたちの成長、地域の生活改善を目指し、2006年11月よりCCF(キリスト教児童基金:米国の海外協力団体)をパートナー団体として、フィリピンに加え新たにスポンサーシップ・プログラムを開始しました。



碎石場で働くチャイルドの親。過酷な環境で1週間働いて、収入は日本円で500円ほど。



支援地域の学校。本、学用品、教師の数が不足している。



住民組織のミーティング風景。地域の人々へは家屋の修繕、治療費の補助、図書室を充実させるための支援などが行われている。



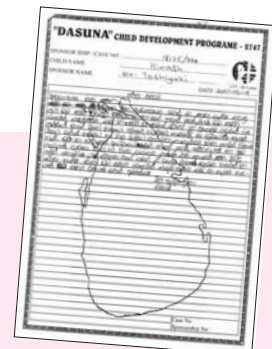
チャイルドが暮らす家

チャイルドのお手紙から

ヒマシュ(小学校5年生/男の子)

お父さん、お母さん、そして僕は支援してくださることにとても感謝をしています。

好きな授業は、算数と図画です。一生懸命勉強したいと思っています。ご支援で、学校の教科書とマンゴーの木を受け取りました。僕の国、スリランカはとても美しい国です。たくさんの貧しい人と、豊かな人が一緒に暮らしていて、それは僕の村でも同じです。僕のスポンサーになってくれてありがとうございます。



協力団体：AMP-IPM (Augustinian Missionaries of the Philippines Indigenous Peoples Mission)
*カトリック修道会であるフィリピン・アウグスチノ宣教会が行う社会事業で、少数民族パラワン族の文化継承、保健・栄養改善、教育活動、環境保護活動を行う。

協力期間：2003年6月1日～2006年5月31日(第1期)
2006年6月1日～2009年5月31日(第2期)

支援対象：パラワン州ブルックスポイント町に住むパラワン族300世帯。このうち水供給事業の対象は、バヨグ地区、ラアング地区の160世帯と小学校1校

事業の背景と目的

少数民族パラワン族は、パラワン島外からの移住者に土地を奪われ、より生活環境の厳しい山間部に追われ、マラリア等の感染症、栄養不良、慢性的な水不足等に起因する子どもの高い死亡率に脅かされる生活を強いられています。

本プロジェクトは、第1期でパラワン族の人々の生活改善をめざして、栄養改善、マラリアを中心とした感染症の早期発見等のための保健ボランティアの育成、伝統文化の保全などの分野で成果を挙げました(2005年度年次報告書参照)。

そして、第1期終了時には、村に安全な水を供給する給水システムが完成しましたが、その維持管理体制を確保するために、住民の自主的な活動を強化することを目的として、事業を3か年延長することにしました。

2006年度の総括

本事業第2期の初年度として、事業目的に沿って、以下の成果を達成しました。

- 1 給水設備が完成し、小学校1校を含む160世帯が安全な水のある生活を確保しました。
- 2 給水設備の維持管理を担う住民組織に、引き続き技術指導が継続されました。
- 3 給水設備の維持費として世帯毎の水道料を5ペソ(1ペソ約2.5円)徴収し始めました。今後は、30ペソまで引き上げ、徴収率の改善方法を検討する必要があります。
- 4 就学前児童や妊婦、授乳中の母親たちの栄養状態は大きく改善しました。
- 5 簡易薬局が計画どおり設置され、今後は具体的な運営計画やシステム作りが行われます。
- 6 マラリア早期発見センターについては、初年度は設置に至らず、2007年度の優先課題となります。
- 7 識字教育、伝統文化保全の分野の研修キットが開発され、文書化が進められています。



活動地域の様子

12歳の女の子と8か月の男の子を持つ父親の声:バシアノ・マドレーさん

娘のレンディアは、飲み水のために2kmも歩かなければなりません。夏には野菜や穀類が育たないので、食べるものがなくて食事を抜くこともありました。しかし、給水設備が稼働し始めると、私たちの周囲の健康や衛生状況は一変しました。夏には野菜や穀物を栽培し、収穫のいくらかを市場で売ることもできました。

このプロジェクトのお陰で、私たちパラワン族は水のある生活を得ることができました。私たちの子ども、孫の代も、この水の恩恵にあずかることができるよう、全力を尽くして設備と水源の保護に努めます。



完成した給水システムを利用して水浴びをする母と子

協力団体：HDCS (Human Development and Community Services)

*ネパールのキリスト教系NGO。病院や知的障害児の施設の経営および、保健分野の事業を実施する

協力期間：1996年7月16日～

支援対象：オカルドウンガ郡（人口16万人）と近隣5郡の住民

事業の背景と目的

ネパール東部に位置する山岳地域において、病院事業と地域保健事業（保健行政サービスの機能強化とプライマリ・ヘルス分野での住民の能力強化）を統合し推進することによって、地域住民の総合的な健康状態の向上を目指した支援を続けています。

2006年度の総括

1 病院事業

検査機器が備わり、分娩室が改装されるなど、入院患者への対応が強化されました。超音波診断、心療内科の分野でスタッフが研修機会に恵まれ、診療の質を向上することができました。3歳未満の幼児に対する無料診療を開始しました。ネパール人の常勤医の不在は引き続き課題ですが、関連病院や医大からの短期派遣が継続的に得られ、医師の配置率は順調でした。郡政府からは結核治療関連の助成金や道路建設に必要な器材購入費の補助を受けました。また、地域住民からも、幹線道路から病院に道路を引くための土地の提供を受け、また、道路建設の際には労働力などの支援を得るなど、良好な関係が続きました。

患者数の増加に伴い、トイレ不足という新たな問題も出てきましたが、病院への期待に応えるために、財政状況をにらみながら、スタッフの能力の強化や、新しい病院機材の導入とともに、設備の改善も進めたいと考えています。



新しくなった分娩室の様子



無事に出産を終えた母親

2 地域保健事業

郡内6ヶ村で簡易薬局の運営を通じた必須医薬品の供給支援や学校での保健衛生教育、保健所スタッフや保健ボランティアへの研修、母子保健活動を継続することができました。1990年代後半から続く政情不穏は、地域保健事業の進展に大きな妨げとなってきましたが、地道に活動を続けてきた成果として、昨年度までの活動地域16ヶ村のうち13ヶ村で簡易薬局の運営が継続されていることが確認されました。新年度の活動地域の拡大をめざし、3つの村で保健状況の調査を実施しました。



支援地域の子どもたち

オカルドウンガ青年クラブ代表 スリア・シュレスタさんの声

オカルドウンガ郡と周辺5郡に住む人々にとって、オカルドウンガ地域病院は機能している唯一の病院です。病院の地域保健活動を通じて、私たちにも健康を守るために果たせる役割があることも学びました。青年クラブでは、緊急手術に必要な輸血用の献血に協力しています。年間の輸血所要量の16.6%が私たち青年クラブからの献血によって賄われていると聞き、誰かの役にたっていること、地域の保健の増進に貢献していることを実感しています。



献血をするシュレスタさん

協力団体：NPCS (Nutrition Promotion and Consultancy Service)

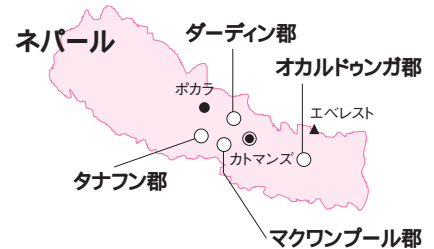
*ネパールのNGO。貧困層や社会的弱者の栄養改善をはかるため、地域の住民への保健教育や他のNGOスタッフ、行政官への研修を実施する。

協力期間：2000年7月16日～

支援対象：ネパールの貧困層、特に女性と5歳未満の乳幼児

事業の背景と目的

ネパールでは、乳幼児の半数が栄養不良、女性の7割、乳幼児の9割が貧血という状況が感染症の繰り返しという悪循環に繋がり、妊産婦・乳幼児の高い死亡率の背景となっています。この栄養問題を改善するために、本プロジェクトは、以下の目的をもって実施されています。



- 1 **全国レベル** 効果的な栄養改善策を全国レベルで普及するため、栄養・保健分野の教材を開発し、学校関係者、国連機関や他のNGOに配布し、また、それらの活動と協働すること。
- 2 **地域レベル** 栄養問題を抱える村々の住民を組織化して、生活改善に取り組むよう支援する中で、家族、特に女性が栄養知識を身に付け、食習慣を変えることができるようにすること。

2006年度の総括

- 1 **全国レベル** 「世界食糧デー」、「母乳促進週間」、「栄養週間」や、「予防接種キャンペーン」等に参加し、栄養分野のポスター、冊子、紙芝居、ビデオ、栄養教育のフラッシュカードやカセット・テープを配布し、食生活の改善を通じた栄養の大切さを広める働きかけを続けました。
- 2 **地域レベル**

ダーディン郡のチェパン族の住む4ヵ村と、マクワンプール郡4ヵ村で、対象地域の保健栄養状態についての調査を経て、現地スタッフの能力強化や他団体との関係構築を進めながら、乳幼児の発育観察、栄養不良児の在宅指導、地域組織の指導者への栄養講習会、母親、保健所スタッフ、中学生、小学生などを対象にした栄養教育を行いました。

また、村々で栄養関係の問題をテーマにしたクイズ大会や詩作りコンテストを開催し、村人の理解と参加を深めました。その結果、マクワンプール郡では、2007年1月現在で5歳未満の子ども延べ11,890人が発育観察を受け、うち82.5%の栄養状態に改善が認められています。



ダーディン郡で栄養教育を受ける母親と子どもたち



地域でとれる食材を使用した調理実習

アビシエック・ラマ君の母親の声

息子のアビシエックが元気がなくなっていることには気づいていましたが、どうしたらよいかわからずにいました。NPCSのスタッフが、アビシエックが重度の栄養不良で、薬と集中的な治療をする必要があると家族に説明してくれました。栄養リハビリ・センターに連れて行ってもらうと、そこには、同じような母子がいました。そこでアビシエックは見違えるほど元気になりました。私も、毎日、子どもと食べ物と栄養についてわかりやすく教わりました。アビシエックは、今は元気な男の子です。



協力団体：ネパール保健省、NPCS (Nutrition Promotion and Consultancy Service*)
*ネパールのNGO。貧困層や社会的弱者の栄養改善をはかるため、地域の住民への保健教育や他のNGOスタッフ、行政官への研修を実施する。

協力期間：2006年10月1日～2009年9月30日

支援対象：ネパール保健省、中部・西部地方の6郡の全保健行政スタッフ

事業の背景と目的

深刻な栄養問題を抱えるネパールでは、ビタミンA等の栄養剤の配布を通じて栄養状態の改善策が進められています。こうした取り組みは、重度の栄養不良児が短期的に栄養状態を改善するうえで効果がありますが、根本的な解決にはなりません。村の人々が、外部から「与えられる」栄養に頼らず、地域で入手できる食材の利用、子どもの栄養を守っていく知識、食習慣の改善、行動力を身につけてこそ、持続的な栄養改善が実現するという考えのもと、この事業が始められました。

チャイルド・ファンドが支援してきた地域レベルの栄養改善事業を通じて、村人に食生活の変化を働きかけ、栄養改善を図るという「食生活改善アプローチ」の有効性が確認されたことを踏まえ、この取り組みをより多くのネパールの母親たちに広めるために、国の保健行政システムの中に組み込み、病院や保健所、村の助産婦さんの活動を通じて食生活改善アプローチを広める体制作りを目指す事業です。全国への普及をも視野に入れた行政への働きかけは、やはりネパールの栄養分野を援助重点分野とするJICAと協力して、草の根技術協力事業(パートナー型)として実施しています。

2006年度の総括

食生活改善アプローチが、今後、ネパール保健政策の中に取り入れられるためには、郡病院、保健所を始めとした保健行政の各機能が、このアプローチを理解して受け入れることが必要です。また、食生活改善アプローチだけでは子どもの健康は守ることはできません。農業や女性の支援を担う各省庁、ネパールの栄養分野に取り組む様々な団体との協力体制を組むことが大切です。

このため、事業開始の最初の活動として、保健省主催により、中央政府各省庁や国連機関、各地方保健局局长、栄養関連分野の活動を行う他団体を招いた全国ワークショップを開催し、栄養改善の取り組みの重要性と、各々の果たすべき役割について率直な意見交換を行いました。このワークショップを皮切りに、モデル郡として選定したダーディン郡、マホタリ郡での活動として、郡の関係省庁事務所スタッフ、郡病院スタッフへの研修を開始しました。



ダーディン郡保健行政官研修にて



ワークショップ風景

ダーディン郡保健行政官研修参加者の声

保健事業の一環として病気になった時の栄養について学ぶ機会はたくさんあるものの、栄養に特化した研修、予防栄養について学べる貴重な研修です。本事業のベースライン調査では5歳未満児の中等度・重度の栄養不良児は50%以上と聞き驚いています。郡病院としても栄養不良児を救済するためにNPCSスタッフと連携を図り、改善に努めたいと思います。



- 協力団体：CCFインドネシア*Christian Children's Fundのインドネシア事務所
CCFスリランカ*Christian Children's Fundのスリランカ事務所
- 協力期間：①2006年5月～2007年10月：インドネシア
②2006年5月～2007年4月：スリランカ
- 支援対象：①インドネシア：アチェ州（アチェ・ジャヤ県、アチェ・バラット県）の津波被災者（2500名の子どもとその家族500世帯）
②スリランカ：アンパラ県の津波被災者1,000名

事業の背景と目的

2004年12月26日にスマトラ島沖で起きた大規模地震と大津波は、インドネシアで16万7,000人、スリランカでは3万5,000人以上の死傷者を出しました。チャイルド・ファンド・ジャパンでは、アメリカの民間支援団体キリスト教児童基金（Christian Children's Fund: CCF）からの要請に応え、CCFのインドネシア、スリランカ両事務所とともに2カ国の被災者の復興支援を実施しました。

現地では、多くの支援団体が家の建設や水の供給など目に見えるインフラの支援は続けていましたが、ソフト面の支援が欠けていました。そのため地域住民が中心になって自分たちのコミュニティでの復興活動を計画実施するための支援、特に困難な状況に置かれた子どもたちに、生活基盤や教育の機会を提供し心の傷を癒していくという活動を重点的に行いました。



2006年度の総括

1 インドネシア

地域社会が自律的に復興活動に携わるような働きかけが進んでおり、これと平行して被災した子どもたちが元の教育環境に戻れるような支援が行われました。この過程では、伝統的な地域社会の機能を回復させること、地域文化に合った子どもたちの活動を行うことに留意して実施しています。

15の地域で復興委員会の立ち上げを支援し、外部からの支援を有効に活用するための自助努力の体制を準備しました。

15の地域に心理的なケアを目的としたチャイルド・センタード・スペース（P15参照）を設置して、子どもたちがお絵描きやゲーム、スポーツ、音楽活動などを通して、心的ストレスを解消しながら通常の生活に戻るための活動を実施しました。遊戯設備や簡易図書室も置かれました。

8カ所で207名の就学前児童を対象に幼児教育活動を実施し、学用品を配布しました。



チャイルド・センタード・スペース（CCS）で、笑顔に戻った子どもたち

2 スリランカ

被災家族の経済的な面での生活の建て直しが進んでいますが、2006年後半に治安が悪化（政府軍と武装勢力の対立）し、経済活動への影響が懸念されています。

被災家庭や若者が経済的に自立するため、職業訓練と小規模ビジネス資金融資を行なう組織（Village Bank）を44カ所に設立。2007年4月末現在1,000家族を越える人々が融資を受け、養鶏、小売業、洋裁などで収入を得ています。



仮りのテントで商売をする女性と、資金の貸付についての相談に乗るスタッフ

協力団体：CCFインドネシア*Christian Children's Fundのインドネシア事務所

協力期間：①2006年6月～8月

②2007年2月～6月

支援対象：①インドネシア・ジャワ島、クラテン県、バントゥル県、スコホルジョ県、マゲラン県の地震被災者(3,793名の子どもと、3,741家族)

②インドネシア・ジャワ島、バントゥル県の14ヵ所の公立小学校

事業の背景と目的

2006年5月27日に発生したジャワ島中部の大地震では、死者5,700名、負傷者38,000名を越える被害を出し、20万戸が全壊または半壊し、多くの校舎が壊れました。チャイルド・ファンド・ジャパンではCCFインドネシアとの協力の下に、地震発生と同時に現地の調査に入り、40ヵ所のコミュニティに子どもたちの心理的なケアを目的としたチャイルド・センタード・スペース(以下CCS)を設置するとともに、建物修理に必要な物資を支給しました。

2006年度の総括

1 クラテン県、バントゥル県、スコホルジョ県、マゲラン県の被災者

上記の4県では3ヵ月間に渡りCCSをとした支援を実施しました。CCSは子どもたちに、日常的な活動にいそむ中で徐々に地震での恐怖や不安をやわらげ、臨時のテント教室ながら再開された学校での勉強に戻る心理的な余裕を与えました。また、地域の人々が復興を話し合う場としても活用され、地震のショックで不安の中にある大人の被災者たちも元気づけました。また、建築修復用としてセメントを合計7,200袋配付しました。配付先は、3,741の家族と幼稚園、小学校やモスクなどです。

2 バントゥル県の14ヵ所の公立小学校

被災から8ヵ月たった2007年2月からは、CCFインドネシアとユニセフによって行われた被災地での児童保護プログラムに協力しました。バントゥル県の14ヵ所の小学校を対象に、40名の先生たちへ研修を行い、地震で影響を受けた子どもたちがスムーズに学校生活に復帰できるように、保護者と共同で運営される学校委員会の活性化をはかりました。

チャイルド・センタード・スペース(CCS)とは

キリスト教児童基金(CCF)が力を入れている緊急支援プログラムのひとつです。被災した子どもたちがカウンセリングやグループ活動、遊びをとおして心の傷を癒し、生きるエネルギーを育むことを目的としています。

ジャワ地震復興支援では、CCSで子どもたちがわがわが経験や描いた絵を用いて、次に地震が起きたときに備えるための心得を記載したパンフレットを作成しました。



崩壊した家の前を歩く被災者



チャイルド・センタード・スペース



バントゥル県にある支援を受けている小学校

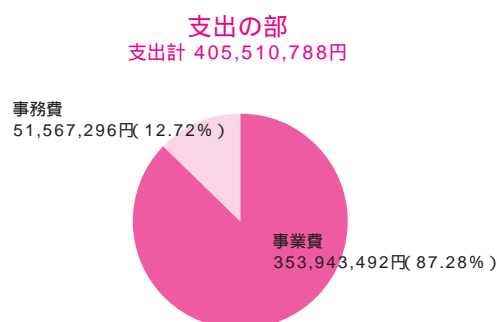
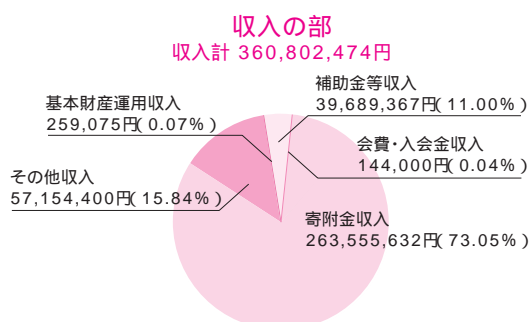
2006年度 会計報告

収支報告書

2006年4月1日から2007年3月31日まで

2006年度会計報告書 収支報告書

科 目	金 額	(単位:円)
I 収入の部		360,802,474
1. 会費・入会金収入		144,000
入会金収入	0	
会費収入	144,000	
2. 補助金等収入		39,689,367
地方公共団体補助金収入	11,689,122	
民間助成金収入	28,000,245	
3. 基本財産運用収入		259,075
研修基金利息収入	37,111	
子どもと地球を守る基金利息収入	221,964	
4. 寄附金収入		263,555,632
スポンサー寄附金収入	212,536,135	
プロジェクト・サポーター寄附金収入	36,487,544	
基金寄附金収入	14,531,953	
5. その他収入		57,154,400
雑収入	1,382,837	
利息収入	71,563	
使途指定特定預金取崩収入	55,700,000	
II 支出の部		405,510,788
1. 事業費		353,943,492
(1) 地域開発支援事業	201,564,850	
スポンサーシップ支援金	129,791,750	
短期開発支援金	20,937,573	
研修費	0	
開発支援事業管理費	32,939,235	
開発支援事業人件費	17,896,292	
(2) 緊急支援事業	62,221,128	
(3) 広報・啓発・提言事業	90,157,514	
広報費	1,123,950	
印刷製本費	4,020,370	
広報・啓発・提言事業管理費	7,157,128	
広報・啓発・提言事業人件費	24,742,517	
募金費	44,843,160	
募金管理費	1,374,502	
募金人件費	6,895,887	
2. 事務費		51,567,296
事務人件費	20,839,590	
事務管理費	30,727,706	
III 次期繰越収支差額		21,275,754
前期繰越収支差額	65,562,433	
前期繰越収支差額調整額	421,635	
当期収支差額	-44,708,314	



貸借対照表

2007年3月31日現在

2006年度会計報告書 貸借対照表

科 目	金 額	(単 位 : 円)
I 資産の部		593,306,621
1. 流動資産	24,654,048	
現金預金	21,044,009	
仮払金	1,979,136	
前払費用	408,596	
未収金	1,202,122	
保証金 (Nepal Office)	20,185	
2. 固定資産	568,652,573	
土地	16,140,000	
建物	109,175,849	
研修基金	83,460,000	
子どもと地球を守る基金	254,850,211	
固定資産物品	6,986,513	
< 特定預金 >		
修繕積立金預金	5,500,000	
退職給与積立金預金	3,000,000	
援助準備金預金	59,540,000	
緊急援助特定預金	30,000,000	
II 負債の部		8,065,162
1. 流動負債	3,378,294	
預り金	827,177	
未払金	2,268,117	
仮受金	283,000	
2. 固定負債	4,686,868	
退職給与引当金	4,686,868	
III 正味財産の部		585,241,459
■うち基本金	463,626,060	
土地	16,140,000	
建物	109,175,849	
研修基金	83,460,000	
子どもと地球を守る基金	254,850,211	
■うち正味財産増減額	121,615,399	
負債及び正味財産合計		593,306,621

注記1. 減価償却累計額 12,580,386円 (単年度分本部会計2,641,609円、単年度分ネパール事務所会計180,108円)

2. 未経過リース料 4,041,870円 (うち1年以内のものは1,152,900円)

3. 子どもと地球を守る基金元本のうち11,758,273円は小松文子記念基金

子どもと地球を守る基金元本のうち15,470,100円は尾崎直道基金

子どもと地球を守る基金元本のうち10,000,000円は磯部陽子記念基金

子どもと地球を守る基金元本のうち80,000,000円は松本記念基金

子どもと地球を守る基金元本のうち12,421,838円は妹尾誠子記念基金

4. 重要な会計方針

(1) 資金の範囲には、流動資産、流動負債を含めます。

(2) 退職給与引当金の計上基準

職員の退職金の支給に備えるため、期末要支給額の全額を計上しております。

(3) リース物件 (所有権が借り手に移転しないリース取引) については貸借対照表に計上せず、発生した期の支出に計上しております。

(4) 固定資産の減価償却は見積耐用年数に基づいて定額法で計算し、直接法で表示しております。

正味財産増減計算書

2006年4月1日から2007年3月31日まで

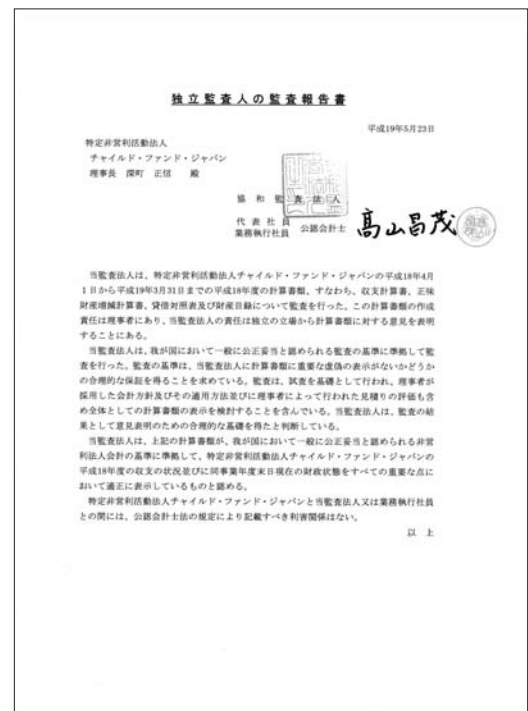
科 目	金 額	(単位:円)
I 増加の部		18,627,655
1.資産増加額	18,627,655	
当期収支差額	0	
固定資産物品購入	1,555,182	
固定資産物品購入(Nepal Office)	4,150,635	
修繕積立金繰入	500,000	
子どもと地球を守る基金増加額	12,421,838	
2.負債減少額	0	
II 減少の部		103,305,349
1.資産減少額	103,234,727	
当期収支差額	44,708,314	
建物減価償却額	2,038,553	
使途指定特定預金取崩	55,700,000	
固定資産物品減価償却額	603,056	
固定資産物品減価償却額(Nepal Office)	184,804	
2.負債増加額	70,622	
退職給与引当金繰入	70,622	
III 期末正味財産合計額		585,241,459
前期繰越正味財産額	669,919,153	
当期正味財産増加額(減少額)	-84,677,694	

チャイルド・ファンド・ジャパンの 会計監査について

チャイルド・ファンド・ジャパンでは法人の監事1名が内部監査を行うとともに監査法人に依頼して、外部監査を受けています。

監査報告書

協和監査法人から右記の監査報告を受けました。



チャイルド・ファンド・ジャパン組織図 / 役員名簿

特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン

2005年3月に社会福祉法人基督教児童福祉会(CCWA)国際精神里親運動部は、特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンへ法人変更をいたしました。



[理事長] 深町 正信(学校法人青山学院院長、青山学院大学国際政治経済学部教授)

[理事] 長山 信夫(日本基督教団銀座教会主任牧師)
武藤 富子(特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン支援者代表)
原島 博(学校法人ルーテル学院ルーテル学院大学准教授)
小林 毅(特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン事務局長)

[監事] 奥澤 行雄(奥澤行雄税理士事務所所長)

チャイルド・ファンド・ジャパン32年の歩み

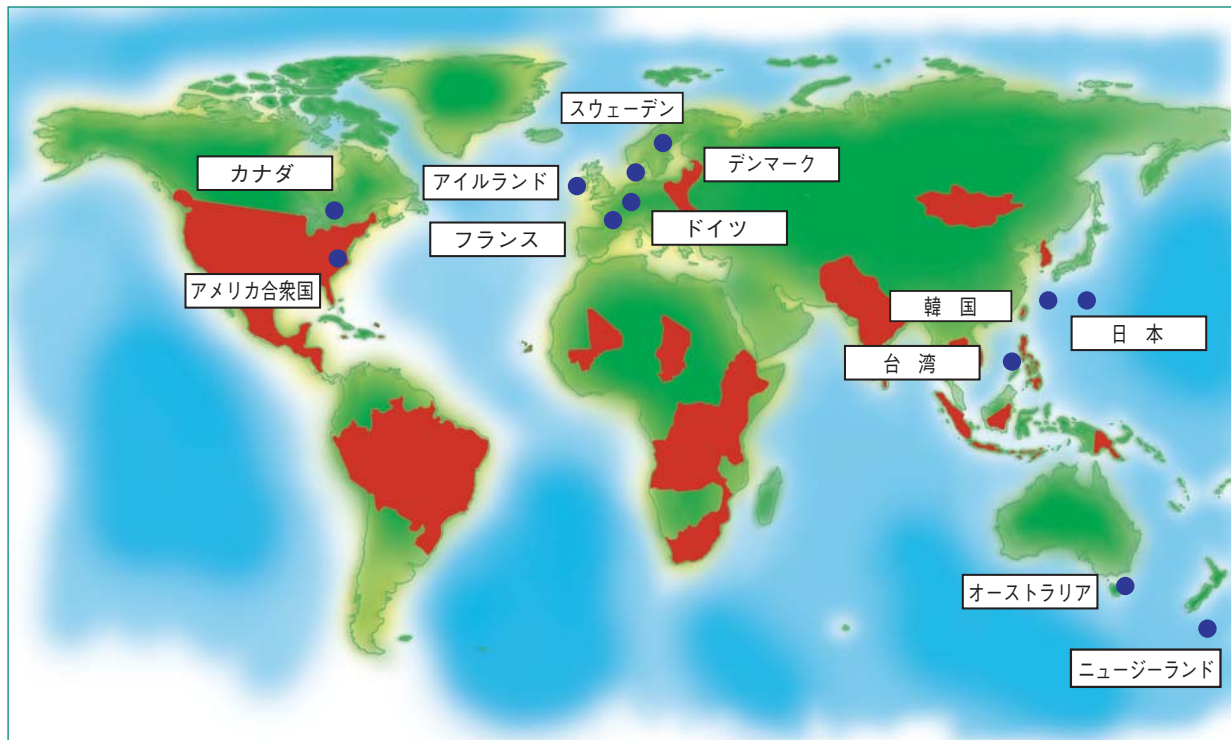
～支援される国から支援する国へと行われた「愛のバトンタッチ」～

- 1945年 第二次世界大戦終了
- 1948年 キリスト教児童基金(CCF)が日本の戦災孤児へ支援をはじめ
- 1952年 CCFの日本事務所として、社会福祉法人基督教児童福祉会(CCWA)設立
- 1974年 日本が経済成長を遂げてCCFの支援が終了
- 1975年 CCWAは国際精神里親運動部を創設しフィリピンでの支援を開始
- 1991年 東京弁護士会人権賞受賞
- 1995年 ネパールで保健事業の支援を開始
- 2001年 全国社会福祉協議会会長特別表彰受賞
- 2005年 CCWA国際精神里親運動部は法人変更により特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパンとして活動を開始
- 2006年 外務大臣表彰受賞

チャイルド・ファンド・インターナショナルについて

チャイルド・ファンド・インターナショナルは、人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちのために、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ活動を行う12団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

<http://www.childfundinternational.org/>



- チャイルド・ファンド・インターナショナルの加盟国
- チャイルド・ファンド・インターナショナルの支援地域

特定非営利活動法人 チャイルド・ファンド・ジャパン 2006年度年次報告書

理事長 深町 正信 (青山学院院長)
 事務局長 小林 毅
 〒167-0041
 東京都杉並区善福寺2-17-5
 TEL 03-3399-8123
 FAX 03-3399-0730
 E-mail childfund@childfund.or.jp
 URL <http://www.childfund.or.jp>
 郵便振替口座 00170-8-196462
 加入者名 特定非営利活動法人
 チャイルド・ファンド・ジャパン
 銀行振込口座 三井住友銀行西荻窪支店
 普通預金口座 0920355
 口座名 特定非営利活動法人
 チャイルド・ファンド・ジャパン

子どもの笑顔のために私たちにもできること チャイルドのスポンサーを募集中です

- スポンサー寄附金は月々4,000円です。
- 支援期間はご自由に決めていただけます。
- ご質問はお気軽に:03-3399-8123

